

Title	谷崎潤一郎『細雪』における会話とナレーション
Sub Title	Dialogue and narration in Tanizaki's novel, Sasameyuki (The Makioka sisters)
Author	大野, 晃彦(Ohno, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.383- 414
JaLC DOI	
Abstract	『細雪』は大阪船場生まれの四姉妹の物語であり、その雰囲気をも具体的に表現するものとして、大阪弁での彼女たちの会話を、直接話法、わけても自由直接話法の連鎖の形で表現する手法がとられている。他方、いわばこの舞台前景を支え、小説全体のプロットを統率するとともに、彼女たちの発話の背後にある事情や心理の動きを描くものとして、標準語による語り手のナレーションがある。本稿では、この両者の連関に注目し、特に上巻の「一」から「九」までのテキストを対象として、ヒロイン雪子と姉幸子、その娘悦子の三者の心理と行動の絡まり合いがいかん表現されているかを分析した。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0383">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0383</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 谷崎潤一郎『細雪』における会話とナレーション

大野 晃彦

## 要 旨

『細雪』は大阪船場生まれの四姉妹の物語であり、その雰囲気を具体的に表現するものとして、大阪弁での彼女たちの会話を、直接話法、わけても自由直接話法の連鎖の形で表現する手法がとられている。他方、いわはこの舞台前景を支え、小説全体のプロットを統率するとともに、彼女たちの発話の背後にある事情や心理の動きを描くものとして、標準語による語り手のナレーションがある。本稿では、この両者の連関に注目し、特に上巻の「一」から「九」までのテキストを対象として、ヒロイン雪子と姉幸子、その娘悦子の三者の心理と行動の絡まり合いがいかん表現されているかを分析した。

## はじめに——分析の視点

周知のように、長編小説『細雪』のストーリーの発端をなすのは、主人公蒔岡四姉妹のうち、次女幸子、三女雪子、末妹妙子が、近隣の高級住宅地の私邸で催される有名ロシア人ピアノニストの会に招かれ、その当日、出かける前に化粧中の幸子が、部屋に妙子（愛称こいさん）の入ってきたのに気づいて発した、「こいさん、頼むわ」、「雪子ちゃん下で何してる」というごく単純簡略な二つの発話である。ところが実際のテキストでは、これら二つの発話の間には、次のように化粧中の幸子の様子を再現する複雑な語り手のナレーションが介在している。ちなみに、『細雪』冒頭のこの場面は、昭和十一年（一九三六）秋に設定されている。《鏡の中で、廊下からうしろへ這入<sup>はい</sup>って来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛<sup>はけ</sup>を渡して、其方<sup>そちう</sup>は見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋<sup>えもん</sup>の顔を他人の顔のように見据<sup>みす</sup>えながら、／「雪子ちゃん下で何してる」／と、幸子<sup>さちこ</sup>はきいた<sup>（注し）</sup>。そしてテキストにはこの直後に、「悦ちゃんのピアノ見ただけでらしい」と、妙子の返事がそれだけの形（自由直接話法）で表現されるが、これに続いて現れるのは、《なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に掴<sup>つか</sup>まって、稽古を見てやっているのであるう》という、会話には表れない幸子の内心の動きを伝える語り手のナレーションである。それだけでなく、次いで語り手はフォーカスを幸子と妙子の会話から新たな登場人物の悦子に移して、この小学一年生の少女が雪子に対して抱く一種特別の感情を次のように説明する。《悦子は母が外出する時でも雪子さえ家にいてくれれば大人しく留守番をする兎<sup>う</sup>であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃<sup>そろ</sup>って出かけると云うので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げると云うことでどうやら納得はしているのであつ

た。つまり『細雪』冒頭でまずクローズアップされたかに見えた幸子と妙子の会話は、テキストの進行から見れば、そのまま直線的に続くのではなく、語り手のフォーカスの移動によって、作中人物の心理や秘められた内的思考、過去の事柄の説明といった、多層的・多元的回路を介したジグザグ運動を通して展開されていくわけである。

事実、以上の悦子についての説明に続くテキストでも、再び幸子と妙子の会話の続きが、『なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一つあるねんで』／「そう、——」と現れるが、すぐにテキストのフォーカスは会話から再び幸子の化粧姿に移り、そのさまが、『姉の襟頸えりくびから両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目はけめをつけてお白粉しろいを引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆うすたかく盛り上っている幸子の肩から背の、濡ぬれた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見える』と、読者の感覚に鮮明に描き出される。ストーリーの発端となった幸子と妙子の会話の続きが本格的に展開されるのは、ようやくこれらのナレーションのお膳立てがそろったあとである。「井谷さんが持つて来やはった話やねんけどな、——」と幸子が続けると、同じく「そう、——」と妙子が応じ、以後二人の会話が、ほぼすべて互いの発話だけを連ねる形で以下のように表現される。『サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。——』／「なんぼぐらいもろてるのん」／「月給が百七十円、ボーナス入れて二百五十円ぐらいになるねん」／「MB化学工業云うたら、仏蘭西系フランスの会社やねんなあ」／「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」／「知ってるわ、そんなこと」(中略)(注2)／「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。——本店は巴里パリにあつて、大資本の会社やねんでなあ」／「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」／「そうやて。そこに勤めてはるねんで」／「その人、仏蘭西語出来はるのん」／「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちよつとぐらい行いてはつたことあるねん。会社の外に夜学校の仏蘭西語の教師してはつて、その月給が百円ぐらいあつて、両方で三百五十円はあ

るのやて」／「財産は」／「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あって、その人が住んでる昔の家屋敷と、自分が住んでる六甲の家と土地があるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」／「それでも家賃助かるよつてに、四百円以上の暮し出来るわな」／「どうやらか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。それから田舎に住んではって、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」／「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやろ」／「器量好みでおくれた、云うてはるねん」／「それ、あやしいなあ、よう調べてみることに」／「先方はえらい乗り気やねん」

『細雪』を一読して印象付けられるのは、大阪弁を話す時岡四姉妹の、わけても芹屋に居を構える次女幸子を中心とする、彼女たちの醸し出す雰囲気の華麗さだろう。ストーリーの一つの中心は、いうまでもなく右の会話の話題となっている。三女雪子の見合い話とそのなりゆきである。ところが、このプロットに沿って展開される見合い話の内容そのものは、ここでのフランスの外資系会社に務める中年サラリーマンの最初の場合のように、一見胸をときめかせるような華やかさを匂わせながら、その実、どれもごく世間ずれした平凡で華やかさとはほど遠いものでしかない。しかもいつそう注目すべきは、それを話題に展開される姉妹の会話も、匂うがごとき彼女らの外見とそのふるまいとは裏腹に、ごく平板でありきたりの散文的なものである。もし『細雪』が、会話のみを中心とする物語であったなら、その読後感は現在のものとはおよそ違うものであっただろう。『細雪』の醸し出す一種あてやかな印象は、この小説冒頭で、お白粉の匂いも鮮やかに、若々しく肉感的な抜き衣紋の襟足を、さし込む秋の日差しに映え輝かせ、化粧にいそむ幸子のしぐさを描く一節に見られるような、語り手のナレーションによる感覚的な表現を抜きにしては考えがたいことだろう。そして彼女の化粧姿が、まさしくそのような表現にふさわしく、またそれを必要としているのも、彼女がこのとき、二人の妹ともども自らが属す

る阪神社交界の一員として、私的で一種特権的なピアノの会に招かれ、そろって目にもあやな装いのもとに出かけようとしているためでもあるだろう。これらのヒロインたちは、いわば三様の花々であり、またそうであるからこそ晴れ輝いているのである。

『細雪』上巻の冒頭に置かれた右の見合い話についての顛末は、全二十九章中の半ば、第十四章（「十四」）で、相手の母親が一種の精神病とわかって壊れることになり、幸子と夫貞之助はすっかり落胆する。しかし見合いを済る雪子を説得するよう幸子から頼まれた妙子に「そうかて、そない急かんならん理由あるやろか」と言葉を返した雪子自身にしてみれば、ことはさほどにも気落ちすべきものでなかったことは確かだろう。結局、雪子の結婚はこの小説の下巻の終わり近く、約四年後に、ある子爵の庶出の次男に興入れすることによってようやく実現するが、『細雪』全篇は、彼女の東京での結婚式を前にした次の有名な一節で幕を閉じる。

《幸子は、そんな工合に急に此処へ来て人々の運命が定まり、もう近々にこの家の中が淋しくなることを考えると、娘を嫁にやる母の心もこうではないかと云う気がして、ややもすると感慨に沈みがちであったが、雪子はひとしお、貞之助夫婦に連れられて廿六日の夜行で上京することに極まってからは、その日その日の過ぎて行くのが悲しまれた。それにどうしたことなのか数日前から腹工合が悪く、毎日五六回も下痢するので、ワカマツやアルシリン錠を飲んで見たが、余り利きめが現れず、下痢が止まらないうちに廿六日が来てしまった。と、その日の朝に間に合うように、大阪の岡米に誂えて置いた鬢が出来て来たので、彼女はちよつと合わせて見てそのまま床の間に飾って置いたが、学校から帰って来た悦子が忽ちそれを見付け、姉ちゃんの頭は小さいなあと言いながら被つて、わざわざ台所へ見せに行ったりして女中たちを可笑しがらせた。小槌屋に仕立てを頼んで置いた色直しの衣裳も、同じ日に出来て届けられたが、雪子はそんなものを見

でも、これが婚礼の衣裳でなかったら、と、<sup>つばや</sup>嘆きたくなるのであった。そう云えば、昔幸子が貞之助に嫁ぐ時にも、ちつとも楽しそうな様子なんかせず、妹たちに聞かれても、嬉しいことも何ともないと云つて、けふもまた衣えらびに日は暮れぬ嫁ぎゆく身のそゞろ悲しき、と云う歌を書いて示したことがあつたのを、図らずも思い浮かべていたが、下痢はどうとうその日も止まらず、汽車に乗つてからもまだ続いてた。》

つまり雪子にとつても姉の幸子にとつても、結婚の成就是ハッピーエンドを意味しない。同様の事情は、バーテンと結婚し、雪子の上京の前夜、いとまごいかたがたやつてきて、預けものなから当座のものを風呂敷包みにまとめ、そそくさと幸子宅から夫と住むアパートへ帰つて行つた妙子にも当てはまることだろう。この小説末尾の右の一節が示しているのは、雪子の結婚の成就が、幸子の結婚に始まる三姉妹の一つのプロセスの終着点だということである。そしてこのプロセスとは、三様一組のあでやかな花々の散りゆくのものにも似た彼女ら三姉妹の分解の過程である。だが、『細雪』の目的は、単にこの終着点を示すことではないだろう。なぜなら、それにいたるまでの間の、このあでやかな三姉妹が織りなす心理ドラマこそ、この小説が描き出すべき主題だからである。このことは、雪子の最初の見合いの場面が出てくる「十」までの部分にすでに見てとることができる。以下ではこのような観点から、『細雪』上巻のこの部分を中心として、雪子、幸子とその娘悦子の心理のからみ合いがどのように表現されているかを、会話とナレーションの関係に焦点を当てて検討する。

## 第一節 幸子・妙子の会話とナレーション

それではまず、舞台の前景をなす現在進行中の会話部分として、前節の幸子と妙子の会話がどのように展開され、それと対比してナレーション部分がどのような表現上の機能を担っているかの検討から始めよう。『細雪』上巻の冒頭で、語り手はまずカメラを幸子と妙子の会話の現場に据えて話を切り出した。この「一」での二人のやりとりは、このあと、『雪あんちゃんの写真、行つたのん』／「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持つて行かはつてん。何やたいそ気に入つてはるらしいねんで」／「先方の写真ないのんか」と、写真の話になり、『階下のピアノがまだ聞えてゐるけはいなので、雪子が上つて来そうもないと見た幸子』が、『その、一番上の右の小抽出こひきだしあけて御覧——』と場所を教える。ここでも語り手は、この後すぐにフォーカスをこの時の幸子の仕草に移して、『と、紅棒を取つて、鏡の中の顔へ接吻せつぶんしそうなおちよほ口をした』と、彼女の一種の色つぽさと可憐さの併存を暗示する視覚表現を添えている。テクストは続いて二人の発話を連ねる形で、写真を見つけた妙子が、『「これ、雪あんちゃんに見せたのん」、「どない云うた』』ときいたのに対して、『例に依よつてどないも云わへん、『ああこの人』云うただけや。こいさんどう思う』』と逆に問い返され、『これやつたらまあ平凡や。——いや、いくらかええ男の方か知らん。——けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ』と評し、それに幸子が、『「そうかて、それに違ちがひないねんもん』』と落ちをつけることになる。テクストはこのあと、装っていくべき和服を見繕おうとした幸子が、体調があまりよくないのを思い出し、妙子に『「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するように云うといてんか』』と頼む。幸子一家は毎年夏から秋にかけ家族三人が脚気によくかかり、ビタミンB注射を自分たちで打つことがならわしになっていた

が、そのうち体調が少し悪いと、それをビタミンB欠乏症のせいにして、「B足らん」と呼ぶようになっていたのである。そして、最後に次の直接話法のナレーションと自由直接話法でこの「二」が幕を閉じることになる。《ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、／「ちよっと、誰か」／と、声高に呼んだ。／——御寮人さん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや》。

このように「一」は幸子の発話で始まり、話し相手の妙子の発話で終わる。つまり冒頭で二人の会話の現場に据えられたカメラは、章を通して彼女らの会話を追いつづけそれを再現する。だが、注意すべきは、いずれもが雪子の見合い話を口にするのに、その場に彼女のこないことを確認し、自分たちの話を悟られぬように用心していることである。そして発話の後景をなすこうした二人の内心の動きは、いずれもナレーションの形で表現されている。右の「一」章末のナレーション冒頭で、妙子が見合い候補の写真を引出しに戻したのは、ピアノの音の止んだのを、雪子が階段を上がってくる前兆と解したからだろう。しかし音が再びしだったので、二人は話の続きを始める。ところが、テキストにこの二人の会話の続きが現れるのは、なんと「四」の終わり近くになってからである。その間の「二」の初めから「四」の終わり近くまでを通してテキストに現れるのは、今回の雪子の見合い話の事情と、その背景をなす三姉妹の実家時岡家のいきさつ、わけても未婚の雪子と妙子にまつわる一家の問題である。そして現在進行中の二人の会話の後景をなすこれらの過去の情報、いずれも語り手のナレーションのうちに吸収されて表現されることになる。だが、この点の具体的な検討は次節以降に回すとして、今は「二」の冒頭から「四」の終わり近くまでをスキップして、「一」からの二人の会話の追跡を続けよう。次の会話部分がそれである。(解釈上必要なナレーション部分を残す。)

《なあ、こいさん、——》／、幸子は、引っかけてみた衣裳が気に入らないで、長襦袢の上をばっと脱ぎすてて別な

畳紙たたしを解きかけていたが、ひとしきり止んでいた。ピアノの音が再び階下から聞えて来たのに心付くと、又思い出したように云った。／「実はそのことで、難儀なんぎしてるねん」／「そのことで、何のこと」／「今、出かける前に、井谷さんに何とか電話で云うとかんならん」／「何で」／「あの人、昨日又やつて来やはって、今日にも見合いさしてほしい云やはるねんが」／「あの人、いつもそんなやで」／「正式の見合いと違うて、一緒に御飯たべるだけやさかい、そんなに堅苦しゅう考えんと、是非承知してほしい云やはって、明日は都合が悪い云うたら、そんなら明後日は如何です云やはるよってに、どうにもいやや云うこと云われへんねん」／「中略」／「雪姉きあんちゃんは」／「さあ、それやがな」／「いやや云うのんか」／「いやとは云うてえへんけど、……ま、昨日来て今日明日のうちに見合いしようて、そない軽々しゅう扱われとうない云うのんが、ほんとうのどこやないやろか。何せはつきり云うてくれへんさかい分らへんねんけど、もうちよつとその人のこと調べてからでもええやないか云うて、何ぼすすめても行こう云うこと云うてくれへんねん」／「そんなら、井谷さんにごない云うのん」／「ごない云おう。——何とかちゃんとした理由云わなんたら、何処どこまでも追究されるにきまったあるし、……今度のごとはどうなるにしても、あの人怒らしてしても、この先世話して貰えんようになつたら難儀やし、……なあ、こいさん、今日明日でのうても、四五日うちに行つてくれるように、一遍こいさんからも云うてみてえな」／「云うてみることはみるけれど、雪姉きあんちゃんそない云い出したら、あかんやろ思うわ」／「いや、そうやないて。——今度のんはあんまり急なこと云われたのんが気に入らんので、お腹の中は満更いややないらしいねん。味善あんじよう云うたら承知するやると、あたしは見てる」。だが、ここまで進んだところで、続く語り手の、《襖ふすまが開いて、雪子が廊下から這入つて来たので、ひよつと聞かれたかも知れないと思ひながら、幸子はそれきり口を噤つぶんだ》のように、二人の会話は中断される。そしてここで「四」が幕を閉じる。次の「五」も同じ幸子・妙子の今の会話場面の続きとなるが、雪子が入ってき

て口にした言葉から話題が一変する。

この日の雪子の第一の関心事は、前節の悦子についての説明にあつたように、《演奏会》（ピアノの会）であり、化粧部屋に入ってきてまず発したのも、《中姉ちゃん、その帯締めて行くのん》と、幸子の帯にクレームをつけることである。というのは、この前のピアノの会に幸子がそれを締めていったところ、息をするたびに、その帯がキュウ、キュウと鳴つて、そばで演奏を聴いている雪子は、《耳について難儀したことがあるねんわ、それで、その帯、音楽会にはあかん思つたわ》ということだったからである。そんなわけで帯選びでひとめめし、ようやく一件落着いたところで、井谷から明日の見合いの件での電話が入る。これに続く幸子と雪子の会話には、見合いに対する雪子の態度が明瞭に表れている。

《「あ、えらいこつちや、電話かけるのん忘れてしもてん」／「ほれ、もう自動車来たらしいわ」／「どうしよう、どうしよう」／「幸子は鼻を鳴らしたが、雪子はまるで他人事ひとごとのように澄まし込んでいた。／「なあ、雪子ちゃん、どない云うとこう」／「どないなと云うといて」／「そうかて、あの人、味善あじよう云わなんだら承知しやはらへんねん」／「そこのとこ、ええようちに頼むわ」／「そんなら、兎に角、明日のとこだけ見合せてもろとくわな」／「ふん」／「ええやろ、それで」／「ふん」／立っている幸子には、坐つて下を向いている雪子の表情を、どうにも読み取りようがなかった》。「五」は、このようにして、見合いの日には是非を問う姉の幸子から目をそらす雪子と、彼女とのコミュニケーションの回路を断られた幸子の姿を残して幕を閉じる。だが、そのすぐ後にこの雪子がわざわざそこまで行つて声をかける相手がいる。彼女が出かけるので機嫌が悪い幸子の娘悦子である。章を改めた「六」は、この二人の会話場面で始まる。だがこれに続くのは、悦子とのやりとりの背景をなす雪子の内面を説明するナレーションであり、ここで初めて彼女の心の秘密が明かされる。次節ではまずこの点について検討する。

## 第二節 雪子の愛の秘密と悦子

それでは、雪子が悦子に声をかける「六」の冒頭の会話から検討を始めよう。井谷の電話の応対に幸子が場を外したので、雪子は悦子のいる応接間を覗いて、これから出かけることを知らせる。以下がそのテキストである（中略部分はナレーション）。

《悦ちゃん、そんなら行って来まつせ》〔中略〕「ええか、あんじよう留守番頼みまつせ」／「お土産分ってるなあ、姉ちゃん」／「分ってる。こないだ見といた御飯の炊ける玩具おもちゃやろ」／悦子は自家の伯母のことだけを「おばちゃん」と呼び、二人の若い叔母のことは「姉ちゃん」「こいちゃん」と呼ぶのであった。／「きつと夕方までに帰るなあ姉ちゃん」／「ふん、きつと帰る」／「きつとやなあ」／「きつとや、お母ちゃんお母ちゃんとこいちゃんは神戸でお父さんが待つてはるさかい、晩の御飯たべに行くけれど、姉ちゃんは帰って来て悦ちゃんと一緒に内でたべる。何ぞ宿題あるのんやろ」／「綴方つづかたがあるねん」／「そんなら遊ぶのんええ加減にして、書いときなさいや、帰ってから見上げるよつてに」／「姉ちゃん、こいちゃん、行ってらっしゃい」／そう云つて玄関まで送つて来た悦子は、スリッパのまま土間へ降りて、敷石の上を跳びながら門の際きわまで二人の叔母の跡を追つて出た。／「帰るなあ、姉ちゃん、嘘ついたらいかんよ」／「何遍二つこと云うてるのん、分ってるがな」／「帰らなんだら悦子怒るよ、ええか姉ちゃん」／「ああうるさい、分ってる分ってる」。テキストはまず直前の幸子との会話と同じく、悦子との会話を、ほぼ自由直接話法の連鎖の形で再現することで、先の幸子との場合とは対照的な雪子の姿を表現する。悦子にとって、雪子は単におみやげをねだれる叔母であるばかりか、母がそばにいないとも、ぜひとも自分と一緒にいなければ気が済まない存在である。そして雪子は雪子で、この悦子の欲求を理解し、それを

満たそうとするだけでなく、自ら宿題の面倒までみてやるうとしている。夕方までに「きつと帰る」と重ねて約束しても、なお門まで追いかけてきて「嘘ついたらいかんよ」、「帰らなんだら悦子怒るよ」と念を押す彼女に、雪子は、さもないとわしいとばかりに「ああうるさい」と声を荒げる。だが続く「分つてる分つてる」という彼女の言葉には、うんざりといったニュアンスはない。雪子の感情の動きをまず彼女の実際の発話によって表現したテキストは、次いでナレーションに移って、今度は彼女の秘められた内面にスポットライトを当てる。以下の一節がそれである。

《雪子はしかし、自分が悦子からそう云う風に慕われているのが嬉しいのであった。どう云う訳か、この児は母親が外出すると云つてもこんなにまで跡を追わないのに、雪子が出かける時はいつも執拗しじこく付き纏まとって何とか彼とか条件を出さずにはいない。雪子は自分が、とかく上本町の本家の方にいるのを嫌って蘆屋あしやの方にばかり来ているのは、本家の兄と折合が悪いこと、姉のうちでも二番目の姉の方が馬が合うこと、等々が主な原因であるように、世間は勿論自分でも何となくそう思い込んでいたけれども、実は悦子に対する愛情が、前の二つにも勝る原因ではないのだろうか、近頃心づくようになった。そしてそう心づいてからは、ひとしお愛情がこまやかになるのを感じた》。『細雪』上巻のテキストは、この「六」に至って、三十歳の今もなお未婚のヒロイン雪子が、その閉ざされた心のうちに知った愛の経験をこのように伝える。彼女が、本来いるべき長姉鶴子の本家（父の生前婿養子をとった）ではなく、同じく婿養子をとって芦屋に分家を作っていた次女幸子宅で過ごすことを好むのは、実はほかでもない、幸子の娘悦子に慕われ自分もこの姪の少女を愛しているからではないかというのである。そしてそれに気づいた今、彼女の内悦子との愛の喜びとそのかけがえのなさがさらに高まる。だがそうであればあるほど、結婚はこの今の自分の喜びの敵ではないか。この雪子の恐れを、テキストはやはりナレーションで次のように説明する。

《彼女は早く母親に死なれ、父親にも十年程前に死なれてしまった今、本家と分家との間を往たり来たりして定った住居もないような身の上であるから、明日が日何処へ縁づこうとも格別心残りはないようなものの、でももし結婚するとなつたら、誰よりも一番親しくし、頼みにもしていた幸子と逢えなくなると云うこと、いや、幸子にはまだ逢えもしようが、悦子と逢えなくなってしまうこと、逢えても最早や昔日の悦子ではなくなっているであろうこと、——自分の及ぼした感化なり、注ぎつくした愛情なりを、次第に悦子が忘れ去つて別な悦子になっているであろうこと、——を思うと、母親としていつまでもこの少女からの愛慕を専有していられる幸子が羨しいような、口惜しい気持がするのであつた》。この雪子の心理で注目すべきは、自分の傾けつくした愛を悦子が忘れてしまうそのことよりも、彼女が母親であり姉である幸子を羨み、さらにくやしさを感じている点だろう。だが目下の見合い話の件でより重要なのは、彼女がいま姉の家でしみじみ握りしめている喜びの感情が、この孤独なヒロインを、次のように未来ではなく、いつまでもこの今の幸福の内にとどまっていたいとさえ願わせる点である。《どうかすれば、強いて身をおとして気のすすまない人の所へ嫁ぐよりは、このままこの家に置いて貰えて、母親の幸子がする役を自分がさせて貰えるのであつたら、それで孤独が救われて行きそつうに思いさえした》。内心このような願望を秘めた雪子が、今回の見合い話に、わがことならぬそぶりを示したとしても不思議ではない。だが皮肉なのは、雪子をこのような思いに誘うきっかけを作ったのが、彼女の結婚を望み、また下の妹妙子の結婚のためにも、それをなるだけ早く実現しなければと心くだく、当の姉幸子だという事実である。しかも彼女は、雪子に嫉妬されるだけでなく、悔しささえ感じさせてしまう。これは最初の雪子のいう《姉のうちでも二番目の姉の方が馬が合うこと》といった単純な心理関係ではない。それではどうしてこういうことが起つたのか。問題の核心にあるのは、二人の悦子との関係と、それに対する幸子の見方・やり方にあつた。それを、続くナレーションは次のように説明する。

《ありていに云うと、雪子をそう云う風に悦子に結び着けたのには、いくらか幸子の仕向け方もあったかも知れない。たとえば蘆屋の家にも、雪子と妙子とが共同で使う部屋を一つ当てがってあったが、妙子がそこを始終仕事場に利用するようになった機会に、幸子のはからいで雪子を悦子と同居させることに定めた》。そして、次第に雪子が悦子の世話に深入りしていったいきさつを、次のように述べる。《悦子の部屋と云うのは二階の六畳の日本間で、畳の上に背の低い小児用の木製の寝台が置いてあり、今まで夜は女中が一人その寝台の下に寝床を敷いて悦子に付き添って寝ていたのであるが、それからは女中の代りに、雪子が折り畳み式になった寝台用の藁布団の上にパンヤの敷布団を二枚重ね、悦子の寝台とほぼ同じ高さに寝床を敷かせて寝るようにした。そんなことが始まりで、病気の時の介抱、学課の復習、ピアノの練習、弁当のお数やお三時の心づかい、等々の役目がだんだん幸子から雪子の方へ移って行った》。これが数年前のこととすれば、現在小学一年生の悦子はまだ三・四歳だったことになる。ということは、雪子が幼い悦子の養母役になったというのである。彼女が母親よりも叔母の雪子に執心し、慕うのは、単にこの叔母が好きだといった単純なことではない。わけても雪子が、次の語り手のいうように、病気がちの悦子の守護神的存在であつてみればなおさらのことだろう。

《悦子を見たところ血色も肉づきも健康そうでありながら、母親に似た体質で何処か抵抗力の弱いところがあるらしく、リンパ腺リンパせんを脹はらすとか扁桃腺へんとうせんを患わづうとかして、よく高熱を出すことがあつたが、そんな時に二日も三日も徹夜で看護して氷嚢ひょうのうや湿布を取り換える、と云うような仕事に、誰よりも堪えられるのは、雪子なのであつた》。これに対し、母親の幸子の方は次のような体たらくである。《その点になると一番丈夫そうに見える幸子が、実は悦子と同様に見かけ倒して、一番意気地がなく、少し無理な看病が続けば結局自分が倒れてしまつて、余計端の者に厄介をかけた。それと云うのが、幸子は先代の蒔岡家が全盛を極めた時代に育ち、亡くなつた父の寵愛を一身に鍾あつめて成人したので、七つになる兎の母親

である今日でも、何処かだだっ児じみた所があつて、精神的にも體質的にも休やすま性がなく、ややともすれば二人の妹からあべこべに窘たじなめられると云う風なのであるが、そんな調子であるから、病気の看護に限らず、総すべて子供をしつけることには甚だ不向きで、よく悦子を相手に本気で喧嘩することがあつた。

だが、幸子の子供じみた態度は、これだけにつきるわけではなく、彼女が弄するロジックにも顔を見せる。幸子宅での雪子の働きを伝え聞いた長姉の鶴子が、《雪子ちゃんがいれば重宝だものだから、それで此方へ帰らしてくれないのだ》、などと陰口をもらすようになる。するとそれを耳にした夫の貞之助が、本家を氣にして幸子に、《雪子ちゃんが此方に泊っているのはよいとしても、自分達親子三人の關係の中へ割り込んで来られるのは面白くないから、悦子との間をもう少し遠ざけたらどうであろうか、悦子がお前を疎んじて雪子ちゃんを慕うようになったら困る》、と注意する。ところが幸子は、自分のやっていることには間違いがない、悦子のごとは大丈夫だし、これはかわいそうな妹のためにも必要なのだと、次のように反論する。

《悦子はああ見えて子供相応に如才ないところがあり、雪子に甘えてはいるけれども、本心は矢張あたしを一番好いてもいるし、何かの場合私に頼たかり着かなければ駄目だと云うことも、結局姉ちゃんはお嫁に行くべき人だと云うことも知っている、あたしも雪子ちゃんのお蔭で子供の面倒を見る手間が省けて、助かっているには違いないけれども、そんなことは雪子ちゃんがお嫁に行く迄の、当座の間のことだ、それより私は、あんなに雪子ちゃんは子供の世話をすることが好きなのだから、今のところ悦子と云うものを当てがって置いて、いくらかでも婚期に後れた不仕合せを忘れさせようと思つているのだ、こいさんには人形の製作と云う仕事もあり、それに伴う収入もあるのに、（そして密かに云い交している人もあるらしいのに）雪子ちゃんには何もそう云うものはないし、極端に云えば身の置き所もないような境涯なのだから、

あたしとしてはあの人が可哀そうでならない、それで悦子に雪子ちゃんの孤独を慰める玩具の役をさせてあるのだ。つまり悦子に対する雪子の献身的な愛とは、善意からとはいえ、もともと幸子が仕掛けた罠の結果なのである。したがって、本節最初に見た雪子の一種の内的モノローグでの、自分が幸子の家にいたがるのは、この姉と馬が合うからというより、娘の悦子との愛のせいなのだというのは正確ではない。事實は、馬が合う姉の家で過ごしているうちに、その娘との愛に落ち込んだということである。そしてそのきっかけでなく、道すじまで作ってしまったのが姉幸子なのである。だが、彼女にはこのことの自覚がない。《あんなに雪子ちゃんは子供の世話をすることが好きなのだから》と、彼女は雪子の内心がわかったような口調で言い切る。この彼女の論理の底にあるのは、悦子の世話はもともと雪子が好きで始めたのだという前提だろう。だが、かくも雪子が悦子の世話に献身的なのは、単に悦子が子供だからというわけではないことは明白である。雪子が悦子をいとおしく思うのは、この少女が、誰よりも、母親の幸子にもまして雪子に愛着を示すからである。雪子の一種思いつめた愛情と、この幸子のロジックの軽さの間には、見過ごせない二人のパーソナリティの違いが認められる。そして何よりも、以後の『細雪』のドラマの展開にとって重要なモメントとなるのは、この幸子の論理の裏に透けて見える、母親であり、姉である自分には、悦子のことも雪子のこともよくわかってるし、うまく取り仕切ることもできる、という彼女のいささか自信過剰で楽観的過ぎる行動様式である。それはえてして少々我田引水的<sup>注3</sup>で、身勝手ださもある。そして実は雪子を悦子に結びつけた幸子宅での長逗留も、もとはといえばこの幸子が望んだこと、悪く言えばこれまた善意から出た罠なのである。だが、次節でこの点を考察する前に、以上のような作中人物間の心理のからまり合いを表現するのに、『細雪』では一貫して語り手の三人称によるナレーションが用いられていることに留意しよう。そして特に会話表現の点で見落としてならないのは、現在進行中の幸子と妙子、幸子と雪子、雪子と悦子の会話がいずれも

直接話法・自由直接話法で表現されているのに対し、右に引用した貞之助と幸子の会話のように、それが過去の事実や回想のナレーションに現れる場合には、間接話法で表現されていることである。そしてこの場合には、直接話法の場合とは違って、大阪弁ではなく、語り手の文体に見合った標準語に近い形が用いられている。このような話法の違いによるストーリーの前景と後景の転換の手法は、本節で検討した「六」に先立って、すでに「一」から「二」への展開でも用いられている。

「一」の冒頭では、まずこの小説の主要プロットである雪子の結婚問題を導入するために、ストーリーの現在場面、姉の幸子が妹の妙子に雪子の新しい見合い話があることを教えるという形がとられている。そして二人の会話のうちに、その相手の社会的地位や家族構成を話題とすることで、雪子の今の社会的位置づけが暗示される。またこの「一」では、登場人物と場面を描くのに、伝統的三人称形式の客観的ナレーションの手法が用いられ、発話は直接話法・自由直接話法で再現されている。しかし次の「二」では、この雪子の現状の背景を説明するのに、フォーカスを現在の幸子・妙子の会話の現場から、その背景をなす過去に移して、実家時岡家の衰退のいきさつと雪子の未婚の理由が語られることになる。テキストはこのトピックを導入するに当たって、まず「一」の会話で幸子が妙子に見合い話の出所を、「井谷さんが持つて来やはった話やねんけどな」と言った、その井谷についての説明から始める。ここでテキストがとっているストラテジーは、まず井谷が何者か、見合い話が出てきたのはどういういきさつかを読者に説明し、次いで「一」の現在場面で進行中の幸子と妙子の会話を大枠の前提として、妙子に話している幸子が、あたかも井谷から今話を聞かされているかのように、井谷の発話とその内容を表現することである。次が第一段の、井谷と見合い話の由来の説明である。

《井谷と云うのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の

世話をするのが好きと聞いていたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セツトに行った時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。まずこの導入の文では、語り手は「二」でのナレーション形式を踏襲して、井谷の最初の発話を、通常の客観的三人称小説のように直接話法で再現している。しかしこれ以後、これに続く部分は、聞き手幸子の視点から、彼女の意識に残った内容がカギ括弧なしで表現されることになる。《実はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐずぐずして良い縁を逃がしてはと思ったので、お預かりしてあつたお嬢様のお写真を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半程も前のことになる》で始まり、《器量好みなどと云うことは、得てそう云う堅人かたじんによくあるものだが、その人も巴里を見て来た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合わなくてもよい、しとやかで、大人しくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立も勿論だけでも、第一に手足のきれいな人がほしいと云う注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけたと思うのであるが、——と云うような話なのであつた》と、最後に、幸子が妙子に伝えているような形で終わる部分がある。この井谷は、下巻末尾で雪子が結ばれることになる子爵の庶子の紹介者ともなる重要なサブキャラクターだが、この最初の見合い話のエピソードでは、女性に似ず齒に衣着せぬ実質尊重家として、雪子が当面する現実を読者に告げる役割も果たしている。《お宅さんは旧家でおありになるし、大阪で「蒔岡」と云えば一時は聞えていらしたに違いないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつ迄もそう云う昔のことを考えておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかであろうか》、という幸子には耳の痛い言葉がそれである。テキストはこの点を補足する形で、《本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪奢な生活、蒔岡と云う古い家名、——要するに御大

家であった昔の格式に囚われていて、その家名にふさわしい婚家先を望む結果、初めのうちは降る程あつた縁談を、どれも物足りないような気がして断り断りしたものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が一層衰えて行くと云う状態になつた」と、雪子の婚期の遅れを説明する。そして一家の衰亡の事情とそれにまつわる蒔岡家の内情を述べるわけである。

そこでは、雪子が自分が幸子宅にきてばかりいるのは本家の兄と折り合いが悪いからと思ひ込んでいたという、この義兄辰雄との折り合いの悪さの理由が説明される。そして実際、それが機縁で、彼女は芦屋の幸子宅へ妙子ともどもいく日も泊まり続けることになる。その際、それに加担したのが姉の幸子であり、彼女には彼女なりの思惑があつた。だが、この時の彼女の思惑は先に指摘したものとは別のところにあつた。それが母親らしからぬ彼女の資質によつて予想もしなかつた娘と雪子の関係をもたらしただのである。しかしこの彼女の最初の思惑も不発だつたわけではない。それどころかそれがなければ、『細雪』冒頭の彼女ら三姉妹のあてやかな姿もなかつたことだろう。次節ではこのいきさつを考察する。

### 第三節 雪子の芦屋滞在と幸子の思惑

それでは、雪子を幸子宅へ長逗留させるきっかけとなつた義兄辰雄との折り合いの悪い事情とは何だつたのだろうか。「二」と「三」の記述によれば、それは三つの段階からなつてゐる。いずれの場合にも、辰雄、雪子の言い分がそれぞれ視点からテクストには伝えられてゐるが、いまここで問題としてゐる雪子の立場から見れば、それは亡き父に対する義兄の裏切りへの反感と彼女への無理解りへの憤懣の結果だといえるだろう。元来辰雄は、「二」での説明のように、名

古屋の銀行家の息子で自身も銀行員だったのが、長姉鶴子の婿養子として養父の家業を継いだのを、養父の死後、そののれんを同業者に譲り、自身は元の銀行員に戻ったビジネスマンである。だが、これには彼相応の判断があったにせよ、雪子にとっては、この義兄こそが、父の受け継ぎ隆盛を誇っていた旧幕以来の由緒ある蒔岡ののれんを、それもほころびが見えていたとはいえ、まだ踏ん張れば持ちこたえられたはずのものを、自分たち義妹や親戚などの反対を押し切つて家来筋の業者に売り渡した張本人なのである。テクストはこの時の彼女の思いを次のように記している。《雪子は昔を恋うるあまり、そう云う義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難してゐるであらうと思つていた》。

二度目の辰雄との齟齬は、このエピソードに続く、辰雄が養父の死後ほどなく雪子にすすめた縁談の件である。相手は豊橋市の資産家の後つぎでその地方の銀行の重役をしており、辰雄の勤める銀行がその銀行の親銀行になつていたことから、彼はその相手の人物、資産状態をよく知っており、《豊橋の三枝家さいぐさならば格式から云つても申分はないし、現在の蒔岡家にとつては分に過ぎた相手であるし、本人も至つて好人物であるから》と、自分の銀行の上司を仲介に頼んで雪子を見合させたのである。彼としては、《義妹は学問はよく出来たかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらい引つ込み思案の、日本趣味の勝つた女であるから、刺戟の少い田舎の町で安穩に暮して行くのには適しているし、定めし本人にも異存はあるまい》と憶断して話を進めたのが、案に反して雪子の方は、相手が《如何いかにも田舎紳士と云う感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つき》としか思われず、《女学校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した》彼女には、《さきさきその人を尊敬することが出来そうもない懸念けんねんがあつた》という結果になつた。それに《豊橋と云うような地方の小都会で暮すことは淋しさに堪えられない気がした》が、この時は幸子が《そんな可哀かわい

そうなのがさせられるものか」と雪子に加勢したのである。だが雪子が否の本心を打ち明けたのは鶴子ではなく幸子であり、それも義兄にはどちらともとれるような生返事ばかりした挙句、見合い後は是非にと相手が乗り気になったぎりぎりになってからのことであつた。このため辰雄は、縁談の仲介を上司に頼んでいたこともあつて窮地に立たされ、妻の鶴子ともども雪子に頼むようにしてすすめてみたが、雪子は頑として首を縦に振ることがなかった。彼にしてみれば、顔が知的でないなどは《下らぬ難癖》にしかすぎず、雪子の態度は単なるわがままか、《邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやろうと云う底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかった》。以後、この義兄はこれにこりこりして、雪子の結婚話を自分から持ち出すことをつしむこととなる。だが、いま問題としている雪子の幸子宅での長逗留に直接かわり、その決定的なきっかけとなつたのは、その数年後の、今度は先の二度の場合とは違って、彼女がはつきりと口に出して義兄に猛反発をした出来事であり、その発端は、「三」の主題となる末妹妙子の駆け落ち事件である。

当時まだ二十歳だつた妙子が、船場の旧家貴金属商の奥畑家の三男と駆け落ちし、それをキャッチした大阪の小新聞社が、妙子を雪子と取り違えて記事にしたことがあつた。この誤報をどう処置したものかを辰雄がさんざん考えた挙句、《過ちを犯した者はどうあるうとも、罪のない者に飛ばつちりを受けさせて置く訳には行かぬと思つたので、取消を申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消ではなく、正誤の記事で、予想した通り改めて妙子の名が出た》のである。名を出された妙子の反発は当然としても、これが、当初の辰雄の意図に反して、雪子の彼に対する反感をいっそうつのらせる結果になつた。この時の二人の義妹の言い分を、次のように語り手は伝えている。

《雪子に云わせれば、新聞に間違つた記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消などと云うものはいいつも人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私達としては、取消にせよ何にせよ一回

でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そつと黙殺してしまうのが賢かったのだ、兄さんが私の名誉回復をしてくれるのは有難いけれども、そうしたらいさんはどうなるであろう、こいさんのしたことは悪いには違いないが、年齒も行かない同士の無分別から起つたこととすれば、責められてよいのは監督不行届な両方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんは勿論私にだつて一部の責任がないとは云えない、そう云つては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知つていてくれると信じているので、あのくらいな記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思つていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなつたらどうするか、兄さんのすることは万事理窟詰めで、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに行つたことは専横過ぎる、——と云うのであつたが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てて上げるのは当り前だけれども、私の名を出さなくても済ませる方法もあつたらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまうことが出来たらうものを、兄さんはそう云う場合にお金を吝しむからいけない、——と、これはその時分から云うことがまけていた。ここに見られるのは、名古屋の銀行家の息子で自身もビジネスマン銀行員であるよそ者の義兄の権力行使に對して、文化風土の異なる船場の旧家で少女時代を送つた、かつての令嬢姉妹が、力を合わせて對抗している姿だろう。いずれにせよ、これを契機にして、この二人の義妹は、それまで一人が帰れば一人が来るといふうに姉の芦屋の分家に来ていたのが、以後そろつて来たなり幾日も逗留するというようになる。元來雪子には、幸子ともども、次の実家の由緒ある土蔵造りの建物のエピソードが示すように、自分の住む土地・建物とその文化的香りへの強いこだわりがある。この心情を、「二」のテキストは、実家の没落のいきさつを敷衍しながら、次のように記している。以下の文中の《今》は、「二」で幸子と妙子の話題となつている雪子の見合い話が井谷から出てきた時点で、昭和十一年秋のことである。

《時岡の家が全盛であつたのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。いや、もつと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末頃には、生活の上にも営業の上にも放縦であつた父の遣り方が漸く崇つて来て、既に破綻が続出しかけていたのであつた。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行われ、次いで旧幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るようになったが、幸子や雪子はその後長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の俵をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであつた》。

幸子が先の豊岡の資産家との婚姻の話を、鶴子とは違つて《そんな可哀そうなことがさせられるものか》と雪子に同情したのも、二人のこの共通感情の現れだろう。雪子が幸子宅を好むのも当然である。それに幸子の夫貞之助の人柄も彼女には好ましかつた。この婿養子の義兄は、《毎日大阪の事務所へ通い、外に養父から分けて貰つた多少の資産で補いをつけつつ暮しているのであつたが、嚴格一方の本家の兄と違つて、商大出に似合はず文学趣味があり、和歌などを作ると云う風であつたし、本家の兄のような監督権を持たなかつたし、いろいろの点で雪子たちには、そう恐くない人なのであつた》とテキストは記している。だが、二人を芦屋にとどめた要因のなかで最も大きかつたのは、姉の幸子が自ら妹たちの芦屋滞在を望んだことだろう。滞在が長くなるのを本家へ気がねした貞之助が、《一遍帰つてもらたら》と注意する度に、幸子は次のように二人の滞在を正当化する。《そのことなら姉ちゃんが諒解してくれるから、心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭になつたことだし、時々妹達が留守にした方が姉ちゃんも息抜きが出来るであらう、まあ当分は当人達の好きなようにさせておいても別条はない》。しかし、幸子の真意は別のところにあつたに違いない。それは、結婚によって一度は失つた妹たちとの家を、新たに自らのリーダーシップのもとに復活させることであ

る。しかも彼女の芦屋の家は、阪神間の明るく爽やかな自然を背景に新たに開けた高級住宅地にあり、そのライフスタイルも当時のモダンな趣味と感覚に彩られている。これは、英文専修科出で、習字、お茶のみならずピアノ、フランス語にも親しむ雪子にとつてもまたとない魅力だろう。他方、妙子の方も、《女学校時代から人形を作るのが上手で、暇がある」とよく小裂を切り刻んでいたずらしていた》のが、芦屋の幸子宅に逗留しているうちに《だんだん技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るようになった》。前節の、幸子が、雪子との相部屋を妙子が仕事場に使つたのを見て、雪子を娘悦子と同室させることにしたのは、こうしたいきさつからである。そして、《彼女の手から生れる可憐な小芸術品は次第に愛好者呼び集め、去年は幸子の肝煎で心齋橋筋の或る画廊を借りて個展を開いた程》になつていた。事は幸子の思惑どおり、彼女の芦屋の家のもとに、かつての船場の三姉妹の華麗な世界が、新たな文化的香りもかくわしくここに蘇つたのである。これを如実に示すのが、「七」の最後に語られる、この日のピアノの会のようにそろつて着飾り出かける三姉妹のあでやかな姿を描く一節である。

《幸子の家から蘆屋川の停留所までは七八丁と云うところなので、今日のように急ぐ時は自動車を走らせることもあり、又散歩がてらぶらぶら歩いて行くこともあつた。そして、この三人の姉妹が、たまたま天気の良い日などに、土地の人が水道路と呼んでいる、阪急の線路に並行した山側の路を、余所行きよそこの衣裳を着飾つて連れ立って歩いて行く姿は、さすがに人の目を惹かずにはいかなかったのだ、あのあたりの町家の人々は、皆よくこの三人の顔を見覚えていて噂し合つたものであつたが、それでも三人のほんとうの歳を知っている者は少かつたであろう。(中略) 全く、この姉妹はただ徒に似ていると云うのとは違つて、それぞれ異なつた特長を持ち、互に良い対照をなしながら、一方では紛う方なき共通点のある所が、見る人の目にいかにもよい姉妹だと云う感を与えた》。そして「七」は次の一節で終わる。《いつも音楽会と云えば

着飾って行くのに、分けても今日は個人の邸宅に招待されて行くのであるから、精一杯めかしていたことは云うまでもないが、折柄の快晴の秋の日に、その三人が揃って自動車からこぼれ出て阪急のフォームを駆け上るところを、居合す人々は皆振り返って眼を翳てた。日曜の午後のことなので、神戸行の電車の中はガランとしていたが、姉妹の順に三人が並んで席に就いた時、雪子は自分の真向うに腰かけている中学生が、含羞みながら俯向いた途端に、見る見る顔を真つ赧にして燃えるように上気して行くのに心づいた。

だが、ことが幸子の思惑どおり運び、いくら彼女ら三姉妹が実際の歳よりはるかに若やぎ、《見る人の目にいかにもよい姉妹だと云う感を与えた》にせよ、それだけで万事めでたしとなるわけでないことは当然だろう。事実、すでに見たように、雪子はその平静な外見の下で、幸子の予想もしない悦子への愛と、幸子自身への嫉妬とくやしさに身を焦がさんばかりであり、他方、妙子はどうかといえは、画廊での人形展をきっかけとして、かつての駆け落ち事件の相手奥畑とまた結婚話を蒸し返しているのである。そしてそれを伝え聞いた幸子が、《あんた達のこと、あたしには分ってるけれど、——今のところ何も云わんと、任しといてえな》と胸を張ったにもかかわらず、次々と彼女を動転させる妙子のドラマが繰り返られることになる。だが、それは『細雪』中巻と下巻の話である。今は再び雪子に戻って、最後に「八」・「九」での彼女と悦子のエピソードを簡単に検討することにしよう。

#### 第四節 悦子の「ウサギノミミ」の作文と雪子

「八」では場面が、「七」の最後の姉妹三人が乗っている阪急電車の車中から、留守番中の悦子の様子に変わる。悦子は

雪子のいいつけ通り、宿題の作文をいつものように応接間で書いていたが、夕方、表のベルが鳴ったので鉛筆を放り出して迎えに出る。そしておみやげの包みを下げて先に応接間に入った雪子の後から自分も跳んで入って、あわてて『見たらいかんよ』と、テーブルの上のノートを伏せる。以下がそれに続く二人の会話シーンのテキストである。

《お土産、見せて》／と、直ぐその包を引<sup>す</sup>つたくって、中の玩具<sup>おもちゃ</sup>を長椅子の上にならべた。／有難う、姉ちゃん／このことやろ／「ふん、これやわ、有難う」／「もう綴方書けたのんか」／「いかん、——いかん、——」／悦子は帳面を取り上げると、両手でひしと胸に抱きしめるようにしながら向うの方へ飛んで行った。／「——これ、ちょっと訳があるねん」／「何やのん」／「うふふふふふ、——これなあ、姉ちゃんのこと書いてあるねん」／「書いてあったかてええ。見せなさい」／「後で、——後で見せる。今はいかんねん」。以上の直接話法・自由直接話法による会話場面の再現に続いて、今度は間接話法による悦子の言い訳が伝えられ、続いてこの夜の雪子の行動が説明される。

《悦子はその綴方は「ウサギノミミ」と云う題で、姉ちゃんのことがちよつと出て来るのだと云った。そして、今見られるときまりが悪いから、自分が寝たあとでゆっくり見て、間違っているところがあつたら直しておいてほしい、自分は明日の朝早く起きて、学校へ行く前に清書するからと云うのであつた。雪子は幸子たちがどうせ映画館か何かへ廻つて、帰りがおそくなるのが分つていたので、夕飯を済ますと悦子と一緒に風呂に漬かつて、八時半頃に寝室へ上つた》。次いで寝つきの悪い悦子を寝かすのが雪子の仕事であること、寝かしつけてからの雪子の普段の様子<sup>様子</sup>が語られる。

《悦子は幼い児のわりに余り寝つきがよくない方で、寝台に這入つてから二三十分の間、何かしきりに興奮してしゃべり続ける癖があるので、彼女を無事に寝かしつけると云うことが一と仕事になっているのであるが、雪子はいつも、こうして悦子を寝かしつけておしゃべりの相手になりながら自分も眠る。そしてそのまま寝通してしまふこともあり、一と寝

入りしてから、悦子を起きないようにそつと自分だけ起きて、寝間着の上に羽織を引っかけて降りて来て、ひとしきり幸子たちと茶飲み話をすることもある。どうかすればそれに貞之助も加わって、チーズに白葡萄酒が出たりして、めいめい一杯ずつぐらいは相手をしたりもする。だが、雪子はこの日、肩が凝って寝付けず、幸子らの帰宅にはまだ間があるので、悦子の作文の宿題をみてやろうと「ウサギノミミ」と題された作文を取り上げて読み出す。するとそこに、悦子の飼っている兎の片方の耳が横に倒れてしまっているのを、悦子に頼まれて立たそうとして、雪子がそれを足の指ではさんで立てたという記述が出てくる。《ネエチヤンハ足デウサギノミミヲツマンデ、立テテオヤリニナリマシタ。シカシネエチヤンガ足ヲオハナシニナルト、ソツチノミミハマタパタリトタオレテシマヒマシタ》という箇所である。悦子の文章は、旧仮名遣いの誤りが三箇所あっただけで、よく書けていたが、雪子は自分のこの無作法な行いを悦子の先生に読まれては大変と、どう直そうかと頭をひねる。が、「手で」と嘘を書かせるわけにもいかず、結局「足で」・「足を」の箇所を削除・言い換えして、《……ネエチヤンモウサギノミミヲツマンデ、立テテオヤリニナリマシタガ、ネエチヤンガソノミミヲオハナシニナルト、マタパタリトタフレテシマヒマシタ。……》と修正する。そして思わずひやりとするとともに、《飛んだところを悦子に書かれてしまったのが、何だかひとり可笑しくもなって来るのであった》という気持ちにさせられる。この「足で」のいきさつを、語り手は次のように説明している。

《雪子は毎朝、悦子を起して朝飯の世話をしやり、鞆かばんの中を調べた上で学校へ送り出してやってから、もう一度寝床へ這入こはせって温ぬくまるのであるが、その日は晩秋の寒さが沁みる朝だったので、寝間着の上に羽二重のナイトガウンを羽織り、鞆かばんも掛けずに足袋たびを穿はいたまま玄関まで送って出ると、悦子がしきりに兎の一方の耳を持って立てようとしていた。そして、いくら立てても其方そちらの耳が立たないので、「姉ちゃん、やってみてえな」と云った。雪子は悦子を遅刻させない

ために、早く手伝つて立ててやるうと思つたけれども、そのぶよぶよした物に手を触れるのが何となく無気味だったので、足袋を穿いている足を上げて拇の股に耳の先を挟んで掴み上げた。が、足を放すと、直ぐ又パタリと兎の横顔の上へその耳が垂れて来るのであつた。》

以上のテクストでの悦子とのエピソードが示しているのは、夜悦子を寝かしつけるのも、朝起こして朝ごはんの世話学校へもつていくものの点検、そして送り出すことなどを、毎日雪子がしているという事態である。そして悦子の作文には、雪子のしたことが、まるでいたずらをするような気持ちで描かれる一方で、これに雪子はヒヤリとしながら、ふとおかしさがこみあげてくるのさえ感じてしまう。だが、悦子の方は、翌朝起きて、書き直された箇所を指さし、《姉ちゃん、何で此処いかなん》と文句を言う。以下がそれに続く雪子とのやりとりである。

《「いややわ、悦ちゃんは。足でした云うこと書かんかてええがな」／「そんなでも、足でしたやないの」／「そら、手で触うたら気味が悪いよつてに、——」／「ふん」／と云つたが、腑に落ちないらしい顔つきで、／「そんなら、その訳書いたらええやないの」／「そうかてそんなけつたいな恰好したこと、書けますかいな。先生が読まはつたら、えらい行儀の悪い姉ちゃんや思やはるがな」／「ふん」。そして最後に語り手は、《悦子はそれでもまだよく呑み込めないらしかった》と記して、この「八」を閉じている。この雪子との会話から読み取れるのは、悦子が事実には忠実だということ、人の表裏の違いをまだ知らないということだろう。言い換えれば、彼女が外に表している事柄は、すべて彼女が見たり感じたりしていることそのままだということである。そして先の寝つきの悪さの説明の箇所、《寝台に這入つてから二三十分の間、何かしきりに興奮してしゃべり続ける癖がある》と指摘されていることは、この少女が一種神経過敏で、眠り込むのを恐れ、次々と頭に浮かんだことをそのまま妄想気味に口に出す性向であることを示唆している。そしてこのことは、後

に雪子が、本家の義兄の丸の内支店長栄転に伴って、長姉鶴子とともに東京に引越し（この時は幸子が気の進まぬ雪子を説得する）、芦屋を離れた後に、悦子が不眠症から精神不安定になり、ふだんのばい菌恐怖症が高じて不安妄想で母の幸子をギョツとさせるようになることへとつながっていく。

ちなみに、悦子を寝つかせてから、雪子が幸子・妙子ともども茶飲み話に打ち興じたり、貞之助も加わりワインとチーズをかたわらに時を過ごしている光景は、雪子にとつて、この幸子の芦屋の分家が第二のわが家のような、他に代えがたいいくつろぎの場になっていることを示している。だが次の「九」では、この同じ家で、雪子が悦子の発した言葉に突然声を荒げる場面が出てくる。雪子がようやく見合いを承諾して、当日午後六時からの席に出るために、幸子と妙子の世話で午後三時ごろから準備している時のことである。

鏡を前に化粧しているとところに、小学校から帰ってきた悦子が入ってきていきなり、『今日は姉ちゃんお婿むすめさんに会うのんやてなあ』と声をかける。と、鏡の中の雪子の顔色の変ったのに、自分もハツとしながら気づいた幸子が、わざとなに気なく、『そんなこと、誰に聞いたん』と問い返す。以下がその時の娘と母親のやり取りである。『今朝お春はるどんに聞いたんよ。——そうやろ、姉ちゃん』／『違うがな（中略）今日はお母ちゃんと姉ちゃんと、井谷さんに呼ばれてオリエントホテル御馳走ごちそうになるねんが』／『そうかて、お父さんも行くのんやないか』／『お父さんかて呼ばれてはるねん』。すると突然雪子が、キツと鏡を見すえたままの姿勢で、『悦ちゃん、下へ行つてらっしゃい』と一喝し、『——下へ行つて、お春どんにちよつと来るように云うて頂戴。悦ちゃんは上つて来んかてよろしい。——』と命じる。雪子のただならぬ気配に、悦子はただ『ふん』といつて立ち去り、代わりに下女で今年十八のお春が『何ぞ御用で、——』と、これも顔色を変えて、おそるおそるふすまを開けて敷居にかしこまる。早々に妙子、貞之助は退散してしまつてい

る。幸子は、今日の見合いを女中たちに知られないよう、特に配慮していなかった落ち度もあつて、これは自分がしなければと、お春を詰問し、その非を責める。《———それら、あたしかて、この間からあんた等のいてるところで電話かけたたりしたのは、注意が足らなんだかも知れん。けどあの電話聞いてたら、なおのこと、今日は何もそない改まったことやない、ほん内証の集りや云うこと、あんたにも分つてる筈やろ。たとい又何であるにしたかて話してええことと悪いこととあるやないか。———そんな、まだどうなるやら分りもせんこと子供に話す云うことあるかいな。———あんた、いつから此処こゝの家にいるのん。昨日や今日奉公に来たんやあれへんのに、それぐらいのこと分らんのかいな》。すると雪子も《このことばかりやあれへん》(中略)「あんた一体いつも口数が多うて、云わんでもええことおしゃべりするのん、悪い癖やわ。………》とお春をしかる。下女を下がらせた後も、幸子は機嫌の治らぬ雪子の顔色をうかがいつつ、《いつも云われてる癖に、何と云うおしゃべりやろ》とお春をくさし、《やつぱり私あたしが不注意やつてんなあ。電話かけたりする時に何とかあの人等らに分らんような云い方もあつてんけど、まさか子供に教おせたりするとは思てえへんよつてに、………》と弁明する。だが雪子は、電話だけではないという。《電話もそうやけど、この間からお春さんの聞いてるところで見合いや何や云うて相談してたのん、気になつてたんやわ》／「そんなことあつたか知らん」／「何遍もあつたわ。———話してるとこへ這入つて来ると、その時は誰も止めるけれど、出て行つてまだドアの外にいるのんに、大きな声で話しやはるよつてに、あれ聞えてたに違いない思うててん》。すると幸子は、この「話しやはるよつてに」が声の大きい貞之助への苦情だと気づくが、またわかつていて言わないのも雪子の悪い癖だと困り顔で《雪子ちゃんそれに気イ付いてたのんやつたら、あの時云うてくれたらよかつたのんに、———》とさとす。だが、心高ぶつた雪子は自分の身のつらさとそれに気づかないような幸子夫婦と女中たちへのくやしさを吐露し、それをなんとかなだめようとする幸子の様

子を記して「九」は幕を閉じる。《まあ、これからあの人等らの前で　こう云う話せんようにしてほしいわ。あたしかて見合あいするのんは嫌いややないねん。……そのつどあの人等に、又今度もあかなんだのかいな思われるのんが辛いつらいさかい……」／急に雪子の声こゑが鼻はなにかかつて、涙なみだが一滴鏡ひとしほの面に影かげを曳ひきながら落ちた。／「そない云うけど、今迄いまかて先方せんぽうから断ことわられたのんは一つもあれへんねんで。——なあ、雪子ちゃん知しってるやろ、いつも見合あいの後のちで先方せんぽうは是非ぜひに云いうてくれはるねんけど、此方こちが氣きに入いらんので、壊こわれてたんやないか」／「けど、あの人等らはそない思おもうてくれへんもん。今度もあかなんだ云いうたら、あの人等らきつと、又断ことわられた思おもうやろうし、思おもわんまでもそんな噂うわさ云いい触ふらすにきまつたあるさかい……そやさかい……」／「もうええ、ええ。その話わ止めやめていいて。——私等わたしが悪わるかったよつてに、これからきつとそないするわ。顔かほが壊こわれてしままうやないか」／幸子ゆきこは寄よって行いって顔かほを直ただしてやろうと思おもったが、今直いまぐでは一層いっしやう涙なみだを誘いい出しそそうな懸念けんねんがあるので差控さしこえた。だが、事の発端はつたんは悦子えつこの「今日は姉ちゃんお婿むすめさんに会あうのんやてなあ」という言葉ことばであり、雪子ゆきこが顔色かほいろを変かえたのも、女中にやうちゆうたちの噂話うわさばなしを聞いたからではなく、悦子えつこから「お婿むすめさん」と言いわれたからである。この言葉ことばが自分おれと悦子えつこの間まを引き裂ひきちぎくことを、彼女かのじよはすでに心こゝろにしみて感じており、自分おれはいつまでも悦子えつこと一つであり続つづけていたいと願ねがっているにもかかわらず、何も知らぬ悦子えつこからそれをぶち壊こわすような言葉を突然とつぜん聞きかされたのである。彼女かのじよのお春おはるや貞まこと之助のすけへの叱責しせき・苦情くじやうは、なるほどと納得なつとくできるものであるにせよ、それ自体それごとが雪子ゆきこにとって本當ほんとうの問題もんだいなのではないだろう。しかしその内心うちこゝろとは裏腹うらむくに、彼女かのじよには蒔岡家まきおかの誇こゝろり高たかき令嬢れいぢやうとしての外聞げいぶんがあり、そのはざまはざまで彼女かのじよは苦渋くじゆする。しかもそれに輪わをかけるように、悦子えつこの無邪氣むじゃぎで罪作つみりなふるまひは、『細雪』下巻しもむきの最後のエピソードにも現あらわれる。雪子ゆきこが、届けられた結婚式けっこんしきのかつらを沈しづんだ心こゝろで床とこの間に置おいておいたのを、学校がっこうから帰かえった悦子えつこがかぶかぶって女中にやうちゆうたちを笑わらわせる。雪子ゆきこは悲かなしいのである。細雪こはゆきは美しく空そらを舞まつても、淡雪たんゆきのように溶とけて消き

え去る。この小説のタイトルは、そのような時岡三姉妹の運命の象徴でもあるだろう。

注

(1) 本稿での『細雪』からの引用は、現代表記にルビを付した新潮文庫版『細雪(上)』、『細雪(下)』により、該当部分を『谷崎潤一郎全集』第十五巻、中央公論社(一九九五)のテキストと照合した。また特にテキストからの引用であることを示すのに、当該部分を《》で囲んだ。なお『細雪 上巻』の「一」―「十三」は一九四三(昭和十八)年一月・三月に『中央公論』に掲載されたが、以後は戦時下の掲載禁止措置のため上巻全篇の公刊は戦後の一九四六年、中巻の刊行は一九四七年となり、下巻の発表は一九四七年三月―一九四八年十月の『婦人公論』誌上になされた。

(2) テキストでは、中略箇所不妙子についての次のような説明が挿入されている。《一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそう云うことには明るかった。そして案外世間を知らない姉達を、そう云う点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年嵩としかまのような口のきき方をするのである。》

(3) 幸子の同様の傾向は、「九」で、雪子ともども見合いの前日、髪装いに井谷の美谷院を訪れた日の、次のエピソードにもうかがうことができる。井谷から、見合いの当日は、付き添いの幸子は顔の造りを「十も十五も老ふけてお見えになるように」、「思いきり地味にして下さらなけりや」と注文される。というのは、井谷には、幸子の「非常にばつとした派手なお顔だちで、それでなくても人目につき易やすくつていらつしゃる」のとは反対に、雪子の方は、「お嬢さんもお綺麗きれいらつしゃいますけれど、何しろああ云う細面の淋さびしいお顔だちですから、奥さんとお並びになると一二割方御損」なので、「奥さんが附きいておいでになつたばかりに纏まとまるものも纏まとまらないでしまふなんてことが、ないとは限りませんからね」というのが心配の種だからである。似たようなことはよく見合いの世話役から言われることで、そのたびに幸子は他人には、自分のようなざらにある顔とは違つて、《ほんとうの昔の箱入娘、(中略)弱々しいが楚々そそとした美しさを持った顔と云えば、先ずうちの雪子ちゃんなどの顔ではあるまいか》などと、雪子のために大いに弁じる。だがその実、内輪では、語り手の記すように、雪子に対して、《さすがに優越感を抑え難いところもあって、「あたしが一緒やったら雪子ちゃんの邪魔することになるねんで」と、夫の貞之助の前でだけは幾らか誇らしげに云つたりした》のである。